「おちぼひろい（1）習合・怪異・協和――日本美術のなかの子=鼠」
『あいだ』第258号　2021年8月20日　23-31頁

あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第143回　おちぼひろい（1）

習合・怪異・協和――日本美術のなかの子=鼠

稲賀 繁美（いなが　しげみ／京都精華大学教授・国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学名誉教授・放送大学客員教授）

歴史以前

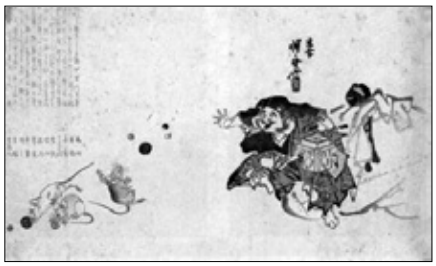
先史時代の日本列島での造形といえば，縄文時代の土偶から，古墳時代の墳墓の副葬品らしい素焼きの埴輪が知られる。だが土偶は人形（ヒトガタ）を基本とする。埴輪には犬や猪，さらには馬などの家畜を象ったものは知られている。だが，鼠らしい埴輪は発見されていないようだ。高床式の穀物蔵や住居の復元には，必ず鼠返しが仕掛けてある。貯蔵行為と鼠害とは裏腹である。だが遺跡から証拠となる鼠対策の遺物は発見されたのだろうか。

干支

干支にかかわる十二支の最初が「子」であり，子午線といえば，太陽が南中する時点を基準とした時刻の目印となる。だが博物学者の南方熊楠も指摘するように，ここで「子」が鼠であり「午」が馬であるという意識は，きわめて薄弱だろう。ましてや「午前」と「午後」とが馬の陽物と尻の穴とは思いも至らない。動物の十二禽と干支の十二支とは，重複はするが分離して認識されている。こうした天文の象徴体系は中国の周王朝時代に確立されたとみなされている。干支は殷の甲骨文字にすでに確認され，方位として用いられるのは漢代から，さらに動物と干支とを結びつけたのは後漢から（王充『論衡』）と言われるが，秦に遡ることも，あるいは可能かという。なお天球の星座の位置に関しては，北辰が真北とする記述が『論語』にあり，日本の江戸時代の剣術には「北辰一刀流」などとあるが，辰では位置がずれている。これは孔子の時代と現在とでは地軸がずれたため，と推定されているようだ。十二支の配列は，現在の時計の文字盤を反時計廻りに遡行する。このため「子」は十一番目の月の呼び名だった。だが同じ「子」の字は元来六番目の月に当てられており，そこに「巳」を，十一番目に「子」を充てる慣例が定着したのは漢代，とする考証もある。だがなぜ鼠なのか？「鼠咬天開」の神話に由来するとの説もある。また朱熹は鼠が一番活発に活動するのが深夜前後だから，古人はそれを根拠に両者を結びつけた，と解釈している。五行説には迷信も纏いつき諸説紛々。「鼠」の由来は俄かには判じ難い。

ヒンドゥー教と日本神話との習合

民衆図像でよく知られる鼠の図に，大黒鼠がある。大黒天はヒンドゥー教の神格マハーカーラに由来する。マハーは大」，カーラは「黒」だから，字義を直訳で漢語に移したのが「大黒」であり，日本へは，平安時代に密教とともに伝来したものと考えられる。室町時代に至って大黒は，日本神話の大国主尊（おおくにぬしのみこと）と習合した。本地垂迹説や逆本地垂迹の説による強牽付会の説だ。神



■01　河鍋暁斎《鼠と大黒》

像に打ち出の小槌や米俵が添えられることとなるのは，江戸時代以降のことらしい。だがそこに鼠が登場するのはなぜだろうか。

『古事記』の根の国の段に，ネズミが登場する。大国主命（オオクニヌシノミコト）は，スサノオノミコトから，さまざまな試練を受ける。その三番目の試練は，荒野に放った鏑矢を取って来るという仕事だった。矢を探して野の中に入ると，スサノオは野に火を放つ。野火に囲まれたオオクニヌシは窮地に立たされる。とその時，一匹のネズミが現れて，「内はほらほら，外はすぶすぶ。」と唱える。ある年代以上の人なら，子供のころに聞かされたことを覚えているだろう。「内は洞穴，外は窄んでる」という暗号のような呪文である。その意を悟って窪みに足を進めると，オオクニヌシは穴に落ち，これ幸いと，地下に潜って火を遣り過ごす。そこへネズミが矢を探して来てくれた。矢羽は子ネズミたちが齧ってしまっていたが。この功あって鼠は大黒の使者と看做されるようになった，というわけだ。

後の時代，このオオクニヌシは仏教由来の大黒天（だいこくてん）と習合して，七福神としても祀られる。大黒天は米俵に乗る。米俵にネズミが付きまとうのは，なるほど当然だろう。だが，それだけではない。そもそもヒンドゥー教の神格，クベーラは仏教に取り込まれ毘沙門天（びしゃもんてん）となる。そのクベーラは宝石を吐くマングースを眷属としていた。中国や西域への伝承の途上で，マングースはネズミに置き換わった。そのため毘沙門天にはネズミが付随する。加えて大黒天は毘沙門天とは近しい類縁の関係にあった。そうした経緯から，大黒天とオオクニヌシとは，ともに鼠を眷属とするという共通点もあいまって，容易に習合しえたと推定できる。このあたりの事情については，彌永信美の論考「鼠毛色の袋の謎」が，大著『大黒天変相』（法蔵館 2002年）に収められている。

川鍋暁斎の大黒と鼠の図を，一般的な縁起物の絵柄として挙げる■01。だが大黒鼠は絵画だけでなく，玩具に広く普及している。米俵に腰を下ろした大黒様の周囲に白い鼠が纏わり付き，大黒は金運の象徴である打ち出の小槌を手にしている。この図像を象った人形は各地に存在するが，例えば今戸人形から派生した芝原人形も明治初期から現在に至っている。岩手県遠野市の附馬牛（つきもうし）人形は，嘉永年間に創始したとの伝承がある■02。土と和紙を練り合わせ臼で搗き，型に

■02　附馬牛人形　《恵比寿大黒カブにネズミ》

■03　A Unicorn sits beside a white and a black rat, both gnawing the trunk of the tree 部分, *Psalter-Hours*, Amiens, MS M.729 fol. 354v, Morgan Library, New York.

取って乾燥させ，彩色を施したもの。恵比須と大黒とが大きな蕪を挟んで座っており，蕪のうえに白ネズミ。さらに刺青の世界でも「大黒鼠」は定番の図柄であり，打ち出の小槌のうえに鼠を配した彫り物が知られる。

仏教説話

「二鼠藤を噛む」という表現は仏教説話に由来する。元来は甘い蜜の誘惑に釣られた男がよじ登る樹木の根本を，白黒二匹の鼠が齧っている。そもそも男は一角獣に追われたために樹木に登って難を逃れたのだった。中国経由での伝承の途中で，生命の木は藤の蔓に変貌したようだ■03。甘い蜜とは現世の煩悩であり，白黒の鼠は昼夜を表し，歳月を象徴し，過ぎゆく時間のはかなさを説く教訓である。男がしがみつく樹木の下には巨大な鰐が大口を開いて待ち構えている。元来はナーガ龍だったのだろう。この図像は東方では日本にまで伝播した。平田篤胤は「二鼠譬喩談」として伝えている。同一の譬談は西方でもキリスト教世界に伝わり，中世の装飾写本などに同一の絵柄が知られている（ニューヨークのピアポント・モーガン図書館蔵の《アミアンの時祷書》に含まれた図など）。だがそれが仏教起源の教訓譚だったことは，西洋では知られぬまま，『イソップ説話』などに混入した。

十二神将立像と水墨画

仏教と十二支との交点には十二神将が現れる。韓半島にも石像の遺品に優品が知られるが，日本の彫像の作例として「子神」（鎌倉時代・12〜13世紀　神奈川・曹源寺蔵）などもある。さらに早い時代の遺品としては，天平時代まで遡れる，奈良郊外は新薬師寺の十二神将も，日本最古の現存する作例として著名である。「子」に相当するのは毘羯羅（ビギャラ）大将■04。左手を腰にあて，右手には三鈷杵をもつ。また鎌倉時代後期には，南宋からの舶来品として水墨画が多く齎され，日本では

■04　ビギャラ大将　新薬師寺・十二神将（国宝・奈良時代）

後世に至るまで「古渡り」として珍重されてきた。例えば重要文化財の指定を受けた，伝銭選筆とされる南宋時代（13世紀）の『鼠瓜図（唐絵手鑑「筆耕園の内」）』などを指摘できよう。

雪舟と鼠

さらに時代を下って，足利時代の絵画に知られる鼠といえば，「雪舟と鼠」の逸話を逸することはできまい。1420年（応永二七年）備中赤浜（現在の岡山県総社市）に生まれた雪舟は，明にわたり，宮廷からの注文を得るなどして，著しい名声を博したとの逸話が伝わる画僧である。幼少のころ寺に預けられたが，住職の留守に襖に絵を描いた。とんでもない悪戯書きだと住職の怒りを買い，罰のため柱に縛り付けられた。その折に自分の涙を墨，足を筆代わりにして鼠を描いた。それが本物そっくりで，いまにも縛られた小僧に噛み付きそうな勢いだったため，住職は慌てて縄を外したという■05。画才を認められた小僧は，ついで京都の相国寺に移り，長じて有名な禅宗の画家になった。この出世物語は，二十世紀になって，少年用の日本偉人伝に必ず挿絵付きで引かれる逸話となった。

この伝説の舞台と伝えられる臨済宗東福寺派，井山の宝福寺（総社市井尻野）には，後世のものだが，その由来を物語る石碑や絵が，参拝客のために置かれている。また文明年間（1469-1486）に雪舟が七代目の住職を務めた岡山の崇観寺（1363年に天台宗の寺として創建，現在は医光寺・臨済宗東福寺派）には，塔頭のひとつに雪舟作と伝える庭が残されている。またこれも後世のものだが，柱に縛られた雪舟とその足元の鼠を象った石像や，件の逸話を描いた絵説きが，境内や拝殿の中に置かれている。近

■05　医光寺（旧・崇観寺）　一木彫り雪舟像（膝にネズミ）

所では土産物のお菓子として，鼠の顔を型取った「雪舟もなか」（登録商標）が販売され，人気を博している。

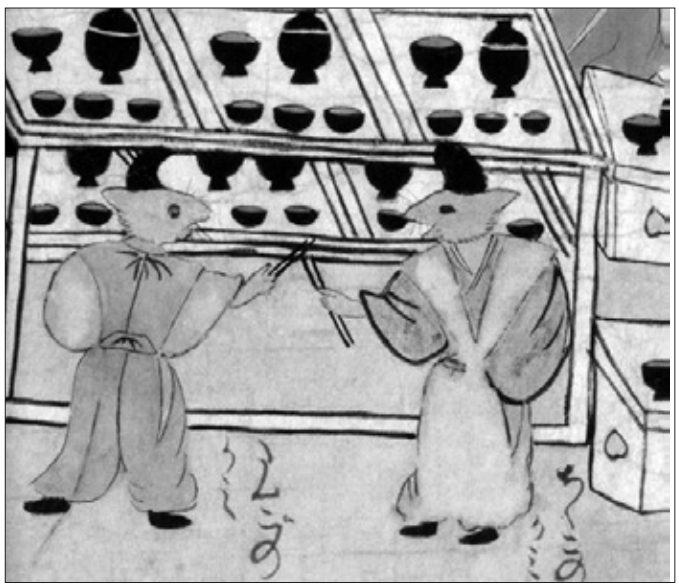
鼠草紙

おなじく中世・室町時代から近世・江戸時代初期にかけて，いわゆる御伽草紙が流行し，多くの写本が流通した。そのなかに鼠草紙と呼ばれる物語が知られる。作者は不明だが，ここに取りあげるのは室町時代の遺品，五巻からなる「鼠草子」の一場面である■06。

京都四条堀川に古鼠の権頭（ごんのかみ）が棲んでいた。畜生に生まれたことを無念に思ったこの古鼠は，人間と結婚し，子孫の代には畜生道を逃れたいものと思い立つ。相談を受けた手下の左近尉（さこんのじょう）は五条油小路の柳屋の娘が器量よしとの評判だと伝え，念願成就のためには清水の観音にお参りするに限ると助言する。以下物語は草子仕立てで展開してゆくが，そのいささか物悲しい顛末は，

■06　《鼠草子》　室町時代

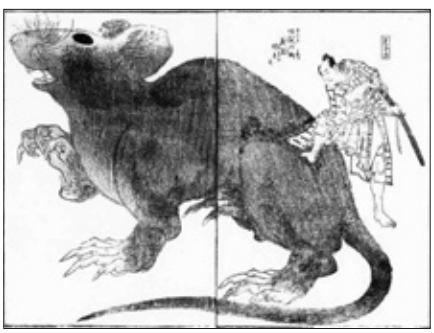
今は措こう。鳥獣の擬人化は，かの『鳥獣戯画』以来の伝統だが，そこには鼠の嫁入りという，日本に限らず世界各地に広く分布する物語の原型が影を落としている。類例はきわめて多いが，江戸時代の遺品では，「ちくごのかみ」と「たんごのかみ」と命名された衣冠束帯の鼠がなにやら婚礼の食卓の準備に勤しんでいる■07。現代でいえば『グリとグラ』にそっくりだとの評もある。



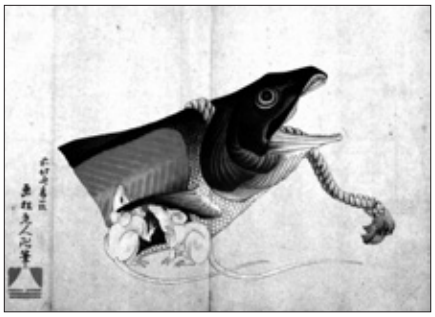
■07　《鼠草子》ちくごのかみとたんごのかみ（江戸時代）

浮世絵に現れる妖怪鼠

妖怪「鉄鼠」(てっそ)といえば，今日の妖怪ファンは京極夏彦の怪異小説『鉄鼠の檻』(1996)で馴染だろう。鉄鼠は，平安時代の僧，頼豪の怨霊とネズミにまつわる日本の妖怪だ，云々とウィキペディア日本語版にも詳細な記事が掲載されている。「鉄鼠」の名は江戸時代の妖怪画集として名高い『画図百鬼夜行』において，作者の鳥山石燕が命名したものとされる。オンライン百科事典によれば，『平家物語』の読み本『延慶本』では，頼豪の名をとって「頼豪鼠」(らいごうねずみ)と呼ばれ，また妖怪を主題とした江戸時代の狂歌絵本『狂歌百物語』では，その由来となる滋賀県大津市の三井寺(すなわち園城寺)の名を取って，「三井寺鼠」(みいでらねずみ)とも呼ぶらしい。江戸後期の読本作者・曲亭馬琴は，頼豪の伝説を踏まえて『頼豪阿闍梨恠鼠伝』を著した。木曾義仲の遺児である美妙水義高(しみずよしたか：清水義高)が諸国遍歴の途中，ある夜，夢枕に頼豪が立つ。頼豪が言うには，かつて義仲が征夷大将軍となるために自分の祠に願書を寄進した。その縁ゆえに，自分は義高に力を貸したい。実は義仲を怨む猫間光実が義高の命を狙っている。この難を逃れるために，義高にネズミの妖術をば伝授して進ぜよう，と頼豪は申し出る。

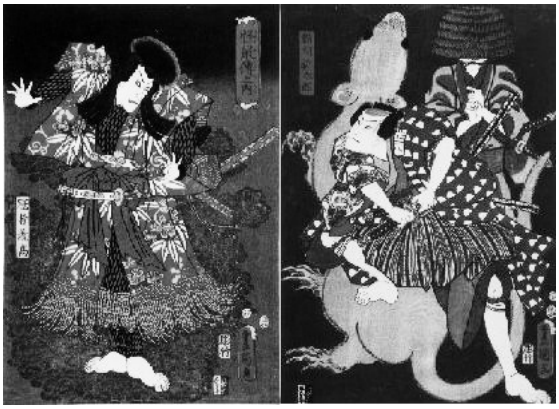


■08　葛飾北斎　頼豪阿闍梨恠鼠伝



■09　葛飾北斎《鮭に鼠》　肉筆

読み本に登場した鉄鼠には，おおくの浮世絵版画が作られた。ほかならぬ曲亭馬琴著・葛飾北斎画『頼豪阿闍梨恠鼠伝』には，猫間光実の前に出現した大ネズミが描かれている■08。馬琴の文中には雄牛ほどの大きさとある妖怪は，北斎による挿絵では，さながら怪獣ほどの寸法に異常な成長を遂げている。国立歴史民俗学博物館の大久保純一氏は浮世絵研究の大家だが，「ねずみの図像学」についても深い造詣と蘊蓄の持ち主であることが知られている。博物館で企画された展覧会の冊子を見ると，「頼豪阿闍梨」のエピソードに始まり，「仁木弾正」の物語ほか，鼠が登場する物語には，さまざまな図像が創案されたことを確認できる。さらに大久保氏は，縁起物の「鮭に白鼠」■9は一種の「判じ絵」であり，実際には恵比須と大黒の組み合せではないか，という新説も提唱しておられる。ここに揚げる画像■10は，三代歌川豊国による《怪鼠伝之内　冠者義高と猫間新太郎》。水木しげるが発案した半妖怪，ネズミ男は，果たしてこの鐵鼠の生まれ変わりだろうか？



■10　三代　歌川豊国　《怪鼠伝之内　冠者義高と猫間新太郎》

■11　二代　歌川豊国　《四代目市川小団次の鼠小僧》1852

鼠小僧変化

浮世絵の例として，四代目市川小團次演ずる『鼠小僧』も取り上げよう■11。こちらは元来，舞台絵であって，安政４年正月（1857年2月），江戸市村座初演の『鼠小紋東君新形』に取材した作品である。作画は二代目歌川豊国。鼠小僧は，盗賊ながら金満家から頂戴した小判を困窮者に配る義賊として人気を得た。なお，2014年正月より，NHKの番組で滝沢秀明主演，二一世紀版「鼠小僧　江戸を翔る」が，「国民的作家・赤川次郎初の時代劇ミステリーを待望のドラマ化」とのリードで放映されている。付記すれば，そのため本稿に必要な情報をウェッブで探そうとして「鼠，干支（えと）」と入力しても，勝手に「鼠，江戸（えど）」に変換のうえ検索エンジンが暴走してしまい，手におえない混乱を来した。図版のとおり，人間の姿をした鼠小僧だが，行燈に照らし出されたその影には，間違うかたなく鼠の横顔が映る。ここには江戸晩期ならではの光学趣味，恐らくは西洋舶来の暗箱（カメラ・オブスキューラ）の影響らしい「だまし絵」の趣向が凝らされている。

工藝への展開

江戸時代にはとりわけ，宗教的な枠組みから解放された図柄がひろく流通する。陶磁器の場合にも，染付で『鼠に大根図菊形』皿（伊万里　江戸時代・19世紀　平野耕輔氏寄贈：■12）のような作例が知られる。また縁起物の画題としては，佐藤一斎『篆書百福寿（七歳書）』（安永7（1778）年　河田燕氏寄贈）などは，手すさびでもあれば，所望されて揮毫し，席画の余興に提供される月並みでもあった。金工の世界でも，『叢梨地花鳥山水蒔絵脇指（金具）』（後藤一乗作

■12　染付　《鼠に大根》図　菊型皿　伊万里，19世紀
東京国立博物館

■13　《豆鼠木彫根付》江戸時代　東京国立博物館

■14　日本銀行兌換券　1円券　明治8（1885）年

江戸時代・19世紀）のような意匠に鼠は登場するし，さらに根付にはきわめてしばしば鼠が細工されていることも，周知の事実だろう。『豆鼠木彫根付』（江戸時代・19世紀，上田令吉氏寄贈：■13）などの多様な作例が，東京国立博物館に寄贈されている。

近代兌換紙幣に現れた鼠

近代を迎え，「文明開化」が唱えられた明治時代には，鼠にも変革の機運が訪れる。兌換紙幣への登壇である■14。およそ世界の紙幣のなかで，鼠の図柄といったものは，他に知られているのだろうか。日本銀行兌換銀券一円券（旧一円券）は，通称「大黒壹圓」。肖像に描かれたのは大黒天と鼠である。明治18年（1885）に発行を開始したもので，日本国で実際に通用した最古の兌換貨幣（法貨）だったという。額面のうえに「兌換銀券」との表記がみえるが，これは事実上，銀本位制によって経済流通がなされていた当時，銀貨との引き換え証券として登場した，文字通りの「兌換券」である。兌換文言には，「此券引かへ尓銀貨壹圓相渡可申候也 NIPPON GINKO Promises to Pay the Bearer on Demand One Yen in Silver」と明記されている。日本敗戦後の昭和33（1958）年に発行停止となった。実際には，本券の発行はそれ以前かなり早い時期にすでに停止されていたらしいが，発行高は累計約四千五百万枚に達するものと推測される。法的措置により現在では不兌換券の扱いとなったが，かえって骨董的な価値が付与される絵柄といってよい。

兌換紙幣とともに近代の発明というべきが，絵葉書だろう。日本の場合，欧米に敏速に追従して郵便業務に取り入れられた。干支の関係で，鼠＝子がはじめて年賀状に登場したのは明治33（1900）年のことと推測される。それから一巡した明治45（1912）年の年賀状がおそらくもっとも意匠に富んでいただろうとは，絵葉書研究家，生田誠氏の観察。その一例には，ほかならぬ大黒天と鼠の絵柄の一円紙幣を鼠の家族が眺めやっている，という画中画の趣向をこらした作品が知られている。紙幣の「壱円」とあるべき部分にはかわりに「謹賀」と記載されており，発行年には「明治四十五年新春」とある。子供が書初めで書いた「子」の字すなわち「鼠」の絵を，画面の外から猫が狙っ

ている，という別種の冗談めいた画中画もある。一九二四年は関東大震災の翌年のため不作だった様子。

窮鼠猫を噛むか？

月耕の『月耕随筆　鼠』という浮世絵が明治期には知られる■15。伝奇説話を種にとり，趣向は怪談仕立てだが，鼠が猫に噛み付いている図柄。諺にいう「窮鼠猫を噛む」という教訓を下敷きにした絵図に他ならない。追いつめられると，か弱い小動物でも天敵に対して果敢な攻撃を仕掛け，時にそれが功を奏する場合すらある。猫と鼠が仇敵になった理由のひとつとして，俗流解釈では鼠に騙された猫が干支の十三番目となり，結果的に干支から脱落したことの怨恨に由来する，という説は有名だろう。であればこそ，鼠と猫とが仲睦まじいという情景は，奇特なものとして珍重もされ，視聴者の好奇心を擽った。

『同盟通信　写真ニュース』には，和製虎猫が我が子のように白い輸入種の天竺ネズミを抱いている写真が掲載されて話題を撒いたことが知られる。1936年１月８日の配信。「猫と鼠，仲よく握手―今年は子の年だ。敵も味方もおおいに仲良くしませう」との標語が付されている。「写真ニュース」はこの年の一月からの発売で，壁新聞として壱枚モノで印刷され，日に一万部を刷ったといわれる。いかにも平和な情景だが，この年の２月26日には軍部青年将校によるクーデタ計画が実行され，内大臣斉藤実，大蔵大臣高橋是清らが殺害される。首都には戒厳令が敷かれ，この大事件以降，日本は急速に軍国主義へと傾斜する。翌37年７月７日には北京郊外で盧溝橋事件が勃発し，

■15　月耕随筆　《鼠》

これが日中戦争の火蓋を切る。「写真ニュース」も，華北・中・南版に加えて，日本軍進駐後には昭南版（シンガポール）まで刷られ，大陸侵攻を計る大日本帝国の国策写真媒体となる。皮肉にもこの猫・鼠仲睦まじき写真記事は，その直前のホノボノたる世相を証言していたことになる。

「黒い猫でも白い猫でも鼠を捕るなら良いネコだ」，とは文化大革命終息後の中国で改革開放を唱えた鄧小平主席の持論だった。だが1936年丙子（ひのえね）の日本にとって，白い天竺鼠を仲良く庇護する虎猫とは，いったいいかなる自画像でありえたのだろうか。

（2014年5月稿）